
日没と友愛 第70回

kono

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日没と友愛 第70回

【Nコード】

N1723J

【作者名】

kono

【あらすじ】

宇宙空間の そのまた向こうに在る “果て” と呼ばれる場所から地球を見下ろしている母。 ある日、地球の某国、とあるテレビ局を訪れた彼女は局員に「地球を洗いたい」と告げる。母とは何者なのか。彼女が放った温度の無い炎は、地球の未来、そしてそこに住む人々の未来にどう作用するのか、“したのか”。 物語の舞台は、地球、ネオアース、ダスト。 登場人物は、幼年、青年、中年、老年、喋るカタツムリや、海に住む人型生物などの人外の者たち。 時にコミカル、時にシリアス、また、時にヒューマン。

日常の暮らしの中でふと感じる幸福に あらためて目を当ててみる。
その作業を日常化させたら、なんとなく心が楽になったような、少
し豊かになったような、そんな気がした。

（前書き）

この作品は、アニメーションや漫画、または舞台演劇の台本に書かれているような作品性を意識して（目指して）書かれた物です。そのため、内容は登場人物の会話が基調となっています。

―過去、地球、地球図書館、地下36階、万樹と雷雄―

（部屋の南東角に置かれているまがましい装置 二基、それらの装置のそばで椅子に座っている雷雄、近距離にいる人物の性別を判別するに足りるだけの明るさを持つ部屋、部屋の北西角に置かれたこの部屋唯一の照明器具（間接照明） が照らし出す 同室の角（北西角）、北西角に うずくまる男児、男児を照らす間接照明、室内の中央 たたみ 二畳分ほどの面積を占める架空の街を模った（カタドった）ジオラマ模型、模型を覆う透明のケース、装置 二基とケースを繋ぐ 二本の管路）

雷雄の説明をかいつまんで要約

装置1： 透明ケース内の上部に疑似の空を造り出す装置

装置2： 透明ケース内に稲光を発生させる装置

【雷雄】 というわけです。 どうです？ あなたも やってみます？

（今しがた完全に動作を止めた装置2のそば、椅子に座り 部屋の出入り口に立つ万樹に話しかける雷雄）

【万樹】 ……遠慮します

【雷雄】 感電なんて しませんけど？

【万樹】 だとしても、結構です

【雷雄】 音も全く出ませんよ？

（上目遣いで雷雄を見る万樹）

【万樹】 悪趣味です

【雷雄】 何と言われようと、気にならない

（装置2に取り付けられたボタンを押す雷雄、起動する装置2、後ずさる万樹）

【雷雄】 ！

（突然、いかつい剣幕で声を上げる男）

【雷雄】 顔を下げて、目をつむって！

（男の声を受けて 即座に言われた通りにする万樹）

（万樹のまぶた越しに ひらめく稲光）

【万樹】 私、ここにおいても大丈夫ですか！？

【雷雄】 そのまま じっ としていて下さい

（ひらめく稲光、わずかに後ずさる万樹）

【万樹】 この部屋から出なくても！？

【雷雄】 装置が停止するまで、どうか そのままで

（自身の両手のひらで両目を覆う万樹）

【雷雄】 そうそう。 そうしていれば、何の問題も無い

（その場に屈み込み 少し開いた両膝の内側に頭を引き寄せるようにして座る万樹）

【雷雄】　そこまで　しなくても良いんですけど…

（停止する装置2、平穩を取り戻す　万樹のまぶたの向こう側、暗い部屋、南東角に設置した装置　二基、その　そばで椅子に座る雷雄）

【雷雄】　すみません。　うつかりしていた

（椅子の足がフロアをこする音、立ち上がる雷雄）

【雷雄】　“　雷様　”　が放射する光を直接目で見てはいけないんです

（暗がり、丸まったままの万樹、近寄って来る雷雄の足音、顔を上げて　雷雄に目を凝らす万樹）

【万樹】　目を悪くしそうな光でした

【雷雄】　失明します

（万樹の背後から聞こえる男児の細い声、万樹から約1メートルの位置で立ち止まる雷雄）

【男児】　僕みたいに

（北西角にいる男児を振り返る万樹）

【万樹】　……………

【男児】　“　いつから　そこにいたのか　”　って？　　ずっとここにいたよ。　あなたが気付かなかっただけ

（間接照明の灯りが照らす男児の正面、閉じられた男児の　まぶた、万樹の背後から聞こえて来る雷雄の声）

【雷雄】 彼は、さっきの稲光を見て 視力を失った

（博物館内の展示物のように 照明を体に浴びせている男児、男児に視線を当てたままの万樹）

【万樹】 医者には？ 【雷雄】 医者なんかに診せたら、

僕が加害者になりかねない

【万樹】 事故でしょう？ 【雷雄】 どう見ても、過失は僕にある

【万樹】 じゃあ。 保身のために この子を部屋に閉じ込めているの？

（男児の細い声）

【男児】 違う。 こうしていれば、いつか僕の目が元に戻る って（部屋の南東角を指差して話す男児）

【男児】 あそこに座っている男の人が そう言ったんだ

【万樹】 “こうしていれば” ？ そうやって “部屋の隅で縮こまっていれば” ？

（自身の上半身を前傾させて 光源に顔を近付ける男児）

【男児】 暖かい

【万樹】 その光を浴びていれば、視力が戻るの？

（部屋の南東角を指差して話す男児）

【男児】 そう言ったよ

（おもむろに目を開く男児、乳白色をした男児の目、凝視する万樹）

【万樹】 ……………

【男児】 驚いた？

【万樹】……………

【男児】驚いたら、声を上げて

【雷雄】わ！ 【男児】そう。そんな感じ

（体を反転させて 雷雄を凝視する万樹）

【雷雄】何ですか？

【万樹】……………

【雷雄】憎いですが、僕が？

（黙ったままで 雷雄を部屋の出入り口へ導く万樹、遠ざかる二人の足音に耳を澄ませる男児）

【男児】離れていく音だ

（室外に出る万樹と雷雄、階段の踊り場の天井に吊り下げられた散月灯の淡い光、対面する二人）

【万樹】なんだ。あなた、そんな顔をしていたの

【雷雄】悪かったですね、こんな顔で

【万樹】あの光は… 【雷雄】どの光ですか？ 【万樹】

あの子を照らしている光のことよ！

（万樹の耳元に話しかける雷雄）

【雷雄】（ただの蛍光灯です）

（眉間にしわを寄せて低い声で話す万樹）

【万樹】今すぐ、あの子を地上へ帰しなさい

【雷雄】帰らせているよ、毎日。毎日、またここへ戻

って来るけど

【万樹】ああしていれば視力が戻る だなんて嘘を あなたが付
くから

【雷雄】もし彼が、“雷様”の稲光を見たくて 毎日ここまで

通って来るんだとしたら？

【万樹】 “見たくて” って…

（きつく雷雄を睨みつける万樹）

【雷雄】 直接、彼に聞いてみれば良いじゃないですか。 “どうして ここへ来るのか” って

（暗い部屋、間接照明が部屋の北西角の壁に大きく浮き上がらせている 男児の影、微動だにしない男児）

【万樹】 ……

【雷雄】 ところで。 ちゃんと見たくありませんか？ もう

一度、さっきの やりますけど

【万樹】 ……

【雷雄】 綺麗ですよ？ あの街…

（無言で部屋に戻る万樹、後続く雷雄）

【雷雄】 （生きているみたいに）

― 過去、地球、夜更けの町、万樹の夫―

（自動販売機の前に敷かれたブルーシートの中央に位置する段ボール箱、その上に置かれた将棋盤を囲む四人の男ら、シートの脇に立つ万樹の夫）

【夫】 ……

（対局に没頭する男ら、自身の対角線上に立っている万樹の夫の視線に気付く男１）

【男1】……………

（男1と目が合った気まずさから 視線を将棋盤に移す万樹の夫、万樹の夫を じつ と見る男1、男1と対局中であり 万樹の夫に背を向けている男2が 台上の駒の位置を不正に変える その様子を黙視している男3と男4）

【男3】…………… 【男4】……………

（男2の不正行為を男1に知らせようと 目配せする万樹の夫、それを受けて すぐに将棋盤へ目を落とす男1）

【男1】……………

（男1の一連の動作を見て 自身の背後に万樹の夫が立っている事に気付く男2、将棋盤から目を離して万樹の夫を見直す男1）

【男1】 兄ちゃん。 さっきの、何？ 何の合図だよ？

【男3】 （気付いていないのか…）

【男4】 “ 兄ちゃん ” って誰だ？

（ようやく万樹の夫の存在に気付く男4、座ったままで 上半身をねじって万樹の夫を見上げる男2）

【男2】 バラしたな、お前

【夫】 まだ、バレていませんよ

（万樹の夫をじつと見上げる男2）

【夫】 そのまま、お続けになって下さい

（軽く頭を下げて その場から立ち去ろうとする万樹の夫、ブルーシートが自身の視界の隅から消えようとする矢先に 男2から呼び止められて 再び男2を向き直る万樹の夫）

【夫】　なんですか？

【男2】　おごれよ。　今の　賭け　を台無しにした　お詫びに
（ブルーシート上に光を注いでいる自動販売機を指差す男2）

【男2】　寒いんだよ

【夫】　……

【男2】　今夜は　よく冷える

（男2と万樹の対話をよそに　歓談を始める他の男ら）

【夫】　ええ。　冷えます

【男2】　じゃあ、お前も飲め

（バスの添乗員がするような仕草で　自動販売機に向けて手をかざす男2）

【夫】　支払うのは、私でしょう？

（自身の　軽く握った片手の拳を　もう一方の手のひらで包み込んで　前者の拳の中に息を吹きかける男2）

【男2】　今夜は　冷えるよな？

（ブルーシートを横目に行き過ぎる通行人ら、小料理屋の開いた玄関戸から漏れ出す　活気のある笑い声、混じり合う通行人の靴音、数秒間漂ってくる路地の匂い、どこかで吠え合っている　二匹以上の犬の声、現在の時刻を表示する　電光掲示板、屋外湯沸かし器が立てる小さな爆発音、ガラリと音を立てて開く　民家の玄関の引き戸、　スーパーの買い物袋が衣服をこする音、はるか上空から聞こ

える 旅客機の飛行音)

【夫】 ……

(ブルーシートの端に 列を為して並べられている 四足分の靴)

【夫】 ええ 冷えますね

―過去、地球、地球図書館、地下36階、万樹と雷雄と男児―

【男児】 僕が言っているのは…

(南東角を指差す男児)

【男児】 あそこにいる男の人の事だ

(自身の手を 男児の手の甲に添える万樹)

【万樹】 あっちには誰も いないわ

(両手の人差し指で 自身の乳白色の瞳を指す男児)

【男児】 この目を治してくれる って

(部屋の中央、取り外された透明ケース、街のジオラマ模型をいじりながら 万樹と男児のやりとりを時折 一瞥する雷雄)
いちべつ

【万樹】 誰もいないわ

【男児】 いるよ

【万樹】 ……

【男児】 椅子に座って、僕の方をじっと見ている

（部屋の南東角、雷雄が “ 雷様 ” と呼んでいる装置の脇にある
背もたれの付いた椅子）

【万樹】 今も？

【男児】 黙って こつちを見ている

（街のジオラマ模型をいじっている 雷雄を振り返る万樹、首を横
に振る雷雄）

【男児】 あなたも雷様を見たんだ？

【万樹】 いいえ。 どの誰かが、私にそれを見せようとして

（再び雷雄をかえりみる万樹）

【雷雄】 すみません…

（男児に向き直る万樹）

【万樹】 もう少しで失明するところだった

【男児】 あの ごつい眼鏡をかけないと 【雷雄】 ああ、
そうだ

（四つん這いになってジオラマ模型をいじる その手を休めて顔を
上げる雷雄）

【雷雄】 忘れないうちに 渡しておきます

（立ち上がって 万樹の元に歩み寄る雷雄）

【雷雄】 これ

（走行中のライダーが頭部に装着する類の アイ・マスクを万樹に
手渡す雷雄）

【雷雄】 それを付けていれば、稲光を見ても 目に害は無い

(男児を振り返る万樹)

【万樹】 どうして、ここにいるの

【男児】 ? いちゃ いけない?

【万樹】 ……

【男児】 あなた だって。 どうして ここにいるの。 見た
いから じゃないの?

(時間経過、放電中の装置2、アイ・マスクを付けている万樹と雷
雄)

【万樹】 …… 【雷雄】 そんなに身構えないで下さい

【男児】 ちゃんと、おもちゃを見て。 まるで水の底みたい
でしょ?

【万樹】 ……

【雷雄】 おもちゃ って言うな。 真心を込めて組み立てた
んだ

【男児】 …… そうだね。 あなたの街。 あなただけの、あなたし
かない街だ

(雷様がケース内に 無作為に放つ稲光、光の作用で 深い青色と
化す 街の模型、模型を覆うケースに両手と鼻先を着けて 稲光が
照らす街のジオラマ模型を見つめる雷雄)

【雷雄】 街が、生きている

【男児】 …… 【万樹】 ……

(雷雄の鼻息に含まれた湿気が曇らせる透明ケース)

【雷雄】 影だよ。 影が動いている

― 現在、地球、夜の町、万樹の夫と 男ら―

【男4】 俺も食ってみたいね、そういう、何、、、懷石（料理） なんかも食えるか？

【男3】 馬鹿。 “中華だ” って言ったる？

【男1】 食いもん屋ばかり軒（のき） を連ねてんだろう？
そりゃ、日本食も 置いて なく はないさ

【夫】 ご存知かとは思いますが、お金を支払って頂かないと食べられませんよ？

【男3】 馬鹿にされてるぞ 【男4】 俺が？ なんで？

（万樹の夫の隣に座る男2）

【男2】 あんな大きい所に店を構えられるぐらいだから、、、あと二・三本は期待して良いんだろうな？

（ブルーシートが広げられている場所から 徒歩で十歩以内に設置されている アルコール飲料を扱う自動販売機を指差す男2）

【夫】 みなさん、いつまで ここに？

【男2】 旦那の傷付いた心が癒えるまで だろうが
（脱力感を込めて小さく笑う万樹の夫）

【夫】 もう癒えましたよ、あなた達のおかげで

【男2】 あと三本は 期待して良いんだろ？

（ブルーシートの上、立ち上がる万樹の夫）

【夫】 お一人につき二本で、合計8本。それを飲み終えたら解散して下さい

【男2】 今夜は冷えるな。凍えそうだ

【夫】 ……

（わざとらしく 小刻みに体を震わす男2）

【男2】 ああ、、寒い

【夫】 体を内側から温めるにも限度があります。良いですか？
飲んだら、解散ですよ

（ブルーシートの端に並べられた靴 五足分の中から 自身の靴を手で引き上げる万樹の夫）

【男2】 旦那

（両靴のかかとの部分を人差し指と中指で引つ掛けたまま 振り返る万樹の夫）

【男2】 お前の嫁さんの事だけだな

【夫】 はい

【男2】 あまり自由にさせ過ぎちゃいけない

【夫】 …… 妻が頻繁に家を空けるのは、私が不甲斐ないから。
そう おっしゃっているんですね？

【男2】 旦那は、もつと野暮ったくても良い

【夫】 お聞きして良いですか？

（自身の顎を少し上向かせて 目を細めて万樹の夫を見る男2）

【夫】 あなた、所帯は？

【男2】 そんなもん持っていないくても、家庭内における男女の役割ぐらい 俺にだって分かるさ

（ブルーシートの上、 男2がシートに着いている片手の指を 不注意により 足で踏んでしまう男1）

【男2】 いてえ！

【男1】 うわっ

（早々と 男2の前に腰を屈める万樹の夫）

【夫】 大丈夫ですか？

（踏まれた手の指の患部を もう一方の手先で摩る（さする）男2）

【男2】 あのな……

（声を荒げる男2）

【男2】 さつさと 買いに行けよ！

―過去、地球、地球図書館、地下36階、万樹と雷雄と男児―

（男児の発言を回顧して独りごとを言う雷雄）

【雷雄】 “水の底”……水底に沈んだ街か

（完全に動きを停止した装置2）

【雷雄】 “母の涙” を覚えていますか？

【万樹】 ……

【雷雄】 酷い水害をもたらしました

（頷く万樹、間接照明に 自身の体の正面を照らしている男児）

【男児】 僕は知らない

（首の座っていない赤ん坊のように 頭をぐらりと回して 男児に
目をそばめる雷雄）

【雷雄】 君は、まだ生まれていなかった

（部屋の出入り口付近で 室内の壁をノックする男、音のした場所を振り返る 万樹と雷雄）

【万樹】 お邪魔しています

（あらたまつて その男に会釈する万樹、愛想の無い表情で男を見る雷雄、北西角に ぽつねんと座っている男児）

【寒父】 ……

（万樹に手招きをする寒父）

【男児】 誰か、来たんだ？

（雷雄に顔を向ける万樹、自身の目線を万樹に当てたままで 顎を寒父の方に突き出す仕草を万樹に見せる雷雄）

【男児】 誰だろう

（南東角の椅子に向かって歩き出す雷雄の足音、出入り口の方角へと遠ざかっていく 万樹の足音、それらに耳をそばだてる男児）

【男児】 離れていく音 だ

（後書き）

前回に引き続き、私のブログで連載されている物語の中から短編物として扱えそうな記事を選んで こちらに転載しました。

引き続き、より多くの方に読んで頂けるよう 手のひらと手のひらを合わせて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1723j/>

日没と友愛 第70回

2010年10月20日20時04分発行